25　「源氏物語」紫式部 ─中古の作り物語

19年度　聖心女子大学

★　次の文章は、『源氏物語』「」の巻の一節に手を加えたものである。これを読んで、後の問に答えよ。

　遠く離れた明石の地から京の光源氏のもとへ知らせが来た。明石入道の娘の明石の君（本文では「子持ちの君」）が姫君（光源氏の娘。本文では「児」）を生んだという。光源氏はこの姫君を将来の皇后にしようという思いを密かに抱き、それにふさわしく養育させるため、事情をよく言い聞かせた乳母を派遣することにした。

　車にてぞ京のほどは行き離れける。しき人さし添へたまひて、ゆめに漏らすまじく口がためたまひてはす、さるべき物など、Ａところせきまでしやらぬなし。にも、ありがたうこまやかなる御いたはりのほど浅からず。入道の思ひかしづき思ふａらむありさま思ひやるもほほ笑まｂれたまふこと多く、またあはれに心苦しうもただＷこのことの御心にかかるも、浅からぬｃにこそは。御文にも「Ｂおろかにもてなし思ふまじ」と、かへすがへす⑴戒めたまへり。

　　光源氏　いつしかも袖うちかけむ子が世をへてづる岩のひ

　までは舟にて、それよりあなたは馬にて急ぎ行き着きぬ。

　入道、待ちとり、喜びかしこまりきこゆること限りなし。Ｘそなたに向きて拝みきこえて、ありがたき御心ばへを思ふに、いよいよいたはしう、恐ろしきまで思ふ。のいとゆゆしきまでうつくしうおはすることたぐひなし。「げに、賢き御心にかしづききこえむと思したるはＹむべなりけり」と見たてまつるに、あやしき道に出で立ちて、夢の心地しつる嘆きもさめｄにけり。いとうつくしうらうたうおぼえて⑵あつかひきこゆ。

　子持ちの君も、月ごろものをのみ思ひ沈みて、いとど弱れｅる心地に、生きたらむともおぼえざりつるを、この御おきての、少しもの思ひ慰めらるるにぞもたげて、御にもなきさまの心ざしを尽くす。「Ｃとく参りなむ」と急ぎ苦しがれば、思ふことども少し⑶聞こえつづけて、

明石の君　Ｚひとりして撫づるは袖のほどなきにふばかりのをしぞ待つ

と聞こえたり。あやしきまで御心にかかり、ゆかしう⑷思さる。

注１　いと親しき人―光源氏のごく親しい召使い。

２　御佩刀―姫君のための守り刀。

３　をとめ子が世をへて撫づる岩の生ひ先―巨岩が、天降る天女の羽衣でくり返し撫でられるうちに、長い時間をかけてすり減り、やがてなくなるという仏教の話を踏まえた表現。天女が長い間撫でる岩のように、姫君の生い先が長いことをいう。

４　津の国―摂津国。京と明石の途中にある国。

問１　―部Ａ「ところせきまで思しやらぬ隈なし」・Ｂ「おろかにもてなし思ふまじ」・Ｃ「とく参りなむ」の現代語訳として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選べ。

Ａ　ところせきまで思しやらぬ隈なし

　①　車内が窮屈になるくらい、大勢の召使いをお遣わせになる

　②　置き場もないほどの品を用意し、一つ残らず気配りなさる

　③　気持ちがふさぐくらい、将来のことに不安をお感じになる

　④　大急ぎでせかすほど、姫君のための準備を念入りになさる

　⑤　細かいところまで、一人一人の支度にも詳しく指図なさる

Ｂ　おろかにもてなし思ふまじ

　①　自分勝手な行動は取らないだろう

　②　失礼な出迎え方をしてはならない

　③　いい加減に世話をしてはならない

　④　浅慮なふるまいをしてはならない

　⑤　軽率な取り扱いはしないつもりだ

Ｃ　とく参りなむ

　①　早々に京へ帰り参りたい

　②　すぐにでもお詣りしたい

　③　はやくを頂戴したい

　④　じっくり拝見しましょう

　⑤　確かに持参するでしょう

問２　=部ａ～ｅの文法的説明として適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じ選択肢を二回以上選んではならない。

①　尊敬の助動詞　　　　②　接続助詞　　　　　　③　存続の助動詞

④　断定の助動詞　　　　⑤　現在推量の助動詞　　⑥　格助詞

⑦　過去の助動詞　　　　⑧　自発の助動詞　　　　⑨　完了の助動詞

⑩　目前推量の助動詞

ａ＝〔　　　〕　　ｂ＝〔　　　〕　　ｃ＝〔　　　〕

ｄ＝〔　　　〕　　ｅ＝〔　　　〕

問３　⌇⌇部⑴「戒めたまへり」・⑵「あつかひきこゆ」・⑶「聞こえつづけて」・⑷「思さる」は誰の動作を表しているか。適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じ選択肢を二回以上選んでもよい。

①　光源氏　　②　乳母　　　　③　明石入道

④　姫君　　　⑤　明石の君

⑴＝〔　　　〕　　⑵＝〔　　　〕　　⑶＝〔　　　〕　　⑷＝〔　　　〕

問４　‐‐‐‐‐部Ｗ「このこと」・Ｘ「そなた」は何を指すか。端的に表す単語一語を本文中から一つずつ抜き出せ。

　　Ｗ＝［　　　　　　　　　　］

　　Ｘ＝［　　　　　　　　　　］

◎問５　‐‐‐‐‐部Ｙ「むべなりけり」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

①　明石入道が、賢明な人柄のおかげで光源氏に信頼されるのは自然なことである。

②　姫君が、愛情深く大切に明石入道に育てられているのはもっともなことである。

③　姫君が、将来の希望を持つ光源氏に愛情を注がれているのは当然のことである。

④　光源氏が、自分の意に沿うように明石の君を世話しようとするのは当然である。

⑤　光源氏が、深い考えから姫君を大事に養育しようと思ったのはもっともである。

◎問６　‐‐‐‐‐部Ｚ「ひとりして撫づるは袖のほどなきに覆ふばかりの蔭をしぞ待つ」の歌は、「いつしかも袖うちかけむ」という光源氏の歌を受けたものである。その解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

①　「姫君を自分の袖で撫で慈しむのはいつのことだろうか」という光源氏の歌に対して、「姫君一人を撫でるのに私の袖は小さいので、誰かに大きな蔭となってほしい」と答え、さらなる援助に期待している。

②　「姫君を自分の袖で撫で慈しむのはいつのことになるのか」という光源氏の歌に対して、「私一人で姫君を撫でるには袖が小さいので、あなたの大きな袖を待っている」と答え、光源氏の来訪を欲している。

③　「すぐに姫君を自分の袖で撫で慈しもう」という光源氏の歌に対して、「私一人で姫君を撫で続ける袖がないので、誰かに大きい蔭となって守ってほしいと思っていた」と答え、乳母の派遣に感謝している。

④　「早く姫君を自分の袖で撫で慈しみたい」という光源氏の歌に対して、「私一人で姫君を撫でるには袖が小さいので、あなたが大きい袖で覆ってくれるのを望んでいる」と答え、光源氏の庇護を願っている。

⑤　「今すぐ姫君を自分の袖で撫で慈しみたいものだ」という光源氏の歌に対して、「姫君一人を撫でるのにも私の袖は小さいので、姫君が大きく岩陰のように育つのを待つ」と答え、姫君の成長を望んでいる。

問７　本文の内容および表現について、適当でないものを、次の中から一つ選べ。

①　光源氏は、厳重に口止めをした上で召使いを付き従わせたが、乳母には格別の感謝の気持ちを表した。

②　道中の「それよりあなた」という表現から、語り手が京側に身を置いて語っていることが読み取れる。

③　光源氏は明石入道が姫君を可愛がっていると想像し、明石入道は光源氏の特別な配慮に感謝している。

④　明石への旅は「あやしき道」「夢の心地」とあるので、想像を超える恐ろしいものだったことがわかる。

⑤　明石の君は数ヶ月の間ずっと物思いにふけり、体調もくずして病床に伏せっていたが、少し復調した。

問８　説話でないものを、次の中から一つ選べ。

①　日本霊異記　　②　発心集　　　　③　宇治拾遺物語

④　菟玖波集　　　⑤　古今著聞集

【解答】

問１　Ａ＝②　Ｂ＝③　Ｃ＝①

問２　ａ＝⑤　ｂ＝⑧　ｃ＝④　ｄ＝⑨　ｅ＝③

問３　⑴＝①　⑵＝②　⑶＝⑤　⑷＝①

問４　Ｗ＝児　Ｘ＝京

問５　⑤

問６　④

問７　④

問８　④

【現代語訳】

　（乳母は）牛車で京のうちは出て行った。（源氏は）ごく親しい召使いを（乳母に）お付けになって、決して他へ漏らさないよう口止めなさってお遣わしになる。（姫君のための）御佩刀や、必要な品々を、置き場もないほど一つ残らず気配りなさる。乳母にも、めったにないほどの情けのこもったお心遣いは並々でない。入道が（姫君を）大切にかわいがっているだろう様子を想像するとつい微笑がお顔に浮かぶことも多く、それに心からしみじみと切ないほどただ姫君のことばかりがお心から離れないのも、（ご愛情が）並々でないからで（あろう）。お手紙にも「（姫君を）いい加減に世話をしてはならない」と、繰り返し繰り返しご注意なさった。

　早くわが袖に抱き取りたい。天女が長い間撫でる岩のように長い将来をもつ姫を。

　摂津国までは舟で、それから先は馬で急いで行き着いた。

　入道は、（乳母を）待ち迎えて、（源氏に）感謝し恐縮し申し上げること限りもない。京に向かって拝み申し上げて、特別の思し召しのほどを思うと、ますます大事に、おそれ多いまでの気持ちがする。赤子の、とてもこの世のものと思われない（ほど）あやしいまでにかわいらしくいらっしゃることはまたとない（ことである）。（乳母は）「なるほど、尊い思し召しによって大切にお育て申し上げようとお思いあそばしたのももっともなことであった」と見申し上げると、片田舎へ旅立って、夢見心地がした嘆きも忘れてしまうのであった。とてもかわいらしくいたわしく思われてお世話申し上げる。

　明石の君も、この幾月もの思いに沈むばかりで、ますます気力が弱まり、（これから先も）生きているだろうとも思われなかったが、（源氏の）お取り計らいに、少しはもの思いが慰められることで頭をもたげて、お使いの者にもできる限りのもてなしをする。（使者たちが）「早々に京へ帰り参りたい」と（帰りを）急ぐので、思うことを少し申し上げ続けて、

　私一人で姫君を撫でていつくしみますには袖が狭すぎます。すっぽり覆うほどの（あなた様の）大きなご庇護をお待ちします。

と申し上げた。（源氏は）不思議なまでに（姫君のことが）お心にかかり、会って見たいとお思いになる。